

自ら学ぶ姿勢を身につけるには

— 自主学習の必要性和その方法を探る —

竹内 理
(関西大学)

1. 自主学習が成功の鍵

「教室外での自主学習が成功の鍵」。かつて私は、新聞のコラムにこのようなタイトルで始まる英語学習に関する記事を書いたことがあります。要旨は「英語を本気で身につけるためには、教室の中での学習時間だけでは不十分。教室の外に目を向け、そこで自主的に何をするのか。その内容と方法が成否の決め手になる」というものでした。

現在のところ、多くの中学校では3年間に290時間程度しか英語を学習する時間は設定されていません。¹ 実際には、ここから学期ごとに何時間かが削られていきます。また、1時間の授業の間ずっと英語の学習をしているわけではではありませんので、最終的には230～240時間程度しか英語の学習をしていない計算となります。² さて、この時間数は多いのか、少ないのか。先生方は、もう肌身にしてみてもわかりだと思いますが、答えはいうまでもなく「少ない」ということとなります。それも相当に少ないという感じです。週4時間時代の推定実質時間数280時間と比べても、約50時間も少なくなります。カナダのイメージン教育を調べた伊東(1997)の研究によると、学習対象のフランス語が「初級レベル」に到達するには、中等学校(中学と高校に相当)修了時までには累積授業時間数が1,200時間(推定実質時間数960時間)に達する必要があります。日本では、高等学校での実質授業時間を追加しても、せいぜい累計630～650時間程度ですので、この960時間にはとても太刀打ちできません。³ もちろん、カナダの状況はフランス語以外の科目もフランス語で教えるイメージンですから、日本の状況と単純に比較することはできな

いでしょう。また、クラスサイズや学習目的、学習開始年齢、社会的環境なども違うことから、このような時間数の比較はあまり意味を持たないかもしれません。しかし上記のような例から、日本の英語授業時間数が英語習得の目的のためには少ないのだ、というイメージだけはつかんでいただけるものと思います。⁴

ではこのように時間数が少ないとなると、一体どうすればよいのでしょうか。答えは明白で、教室の外での学習を最大限に促進して、不足を補っていくしかないのです。ご存知のように、現状の授業時間数では、導入と少しの練習だけで、教室内はもう手一杯の状態です。加えてクラスには、いろいろなレベルや背景を持った生徒が混在しており、生徒一人ひとりの理解度も異なってきます。こうなると、定着を目指した反復練習や発展学習を授業時間内に行うことは、かなり困難になります。だからこそ、教室「外」での時間を何としてでも活用して、授業「内」での学習時間の不足を補っていかねなければならないのです。ただ、教室の外での自主的な学習をいきなり生徒に期待しても、これは Asking for the Moon でしょう。なぜなら、学習者が自ら主体的に学んでいくという姿勢(とそのための技能)は、意図的に育てなければ身につくものではないからです。

2. メタ認知能力の大切さ

では、どうすれば自主学習の芽を少しでも育てることができるのでしょうか。まず考えられることは、「メタ認知」能力を生徒に身につけさせることです。メタ認知というと何か難しいことのように聞えますが、ようは「段取り」あるいは「計画・調整」のことを指します。それぞれの生徒に、1週間、1ヶ月、

1学期というような単位で英語学習の目標を立てさせ、目標達成のための学習方法を考えさせ、進捗状況を教師(＋クラスの仲間)と一緒にモニター・評価しながら改善を加えていくという、いわば「自己調整」の過程のことです。少し理想論をいえば、各学年を終える頃には、「英語を使って～ができるようになりたい」という「なりたい自分像」を設定させてから、それにあわせて計画を立てるという形態も考えられます。

多くの先生方は、「こうすれば単語を覚えられるよ」、「こうしたら発音がうまくなるぞ」という具合に、現在の学習課題を解決する方法(これを「認知ストラテジー」といいます)は、きちんと提示してこられたと思います。しかし、英語学習に限らず、学習をうまく進めている生徒を詳しく観察すると、目の前の学習課題を解決する能力はもちろんのこと、学習をある一定の目標に向かって組織していく力(つまり段取り力が高いことがわかります。さらに、個々の課題を解決する認知ストラテジーは、この組織する力があって初めてその効果を発揮するようなのです。こうなってくると、段取り力というのは、きわめて大切な、より上位の能力ということになります。ところが残念なことに、この力はすべての生徒が自然に身につけているような、そんな能力ではないようです。根気よく教えて、しっかりと身につけさせてやらねばならない厄介な代物なのです。

このようにメタ認知の話をすると、よく先生方から、「理屈はわかるけれど、これは英語の授業でやることなのでしょうか」と問われることがあります。ただでさえ授業時間が少ない状況ですので、これはしごく当然の質問だと思います。しかし、英語の授業でやらないのであれば、どこでやればよいのでしょうか。どこにもそんな時間は見当たりません。でも一方で、生徒のメタ認知能力を育成して計画性を身につけてやらねば、英語を含む学力は伸びないのです。このジレンマを即座に解消する方法は、残念ながら私には思いつきません。現段階でいえることは、英語を含むすべての教科において、授業内・外の学習を利用して、段取り力の育成につながる意識的な取り組みを行うべきである、ということのみです。

ちなみに、メタ認知能力の改善を図るようにしていると、その過程で思わぬ副産物に出会う場合があります。生徒が自らの学習を振り返っていく中で、なぜ目標が達成されなかったのか、その原因が何にあったのかなど、彼らの置かれている問題や状況、さらには心情までも伝えてくることもあるのです。もちろん生徒が心を許すのは人間関係ができて上がっている場合のみですので、初めからこのような状況が生まれるとは思えません。しかし、メタ認知能力の育成過程は、どうやら単なる段取り力の養成に終わらない、比較的大きな可能性を秘めていることだけは間違いのないようです。

3. 「授業の円環」の考え方

生徒にメタ認知を求める以上、教師の側にもメタ認知的思考が求められるのはいうまでもないことでしょう。それでは、教師はどのようにメタ認知的思考を発揮すればよいのでしょうか。

筆者らの動機づけ方略の調査によると、中学では授業と直接つながらない、あるいは成績と関係しない学習は、いくらか教室「内」で奨励しても、教室「外」での学習として成立しない傾向があることがわかっています。残念なことですが、生徒は英語をコミュニケーションや自己表現のツールとしてはとらえてくれません。成績や受験のような外発的な動機がないと、学習がなかなか前に進まないようです。これは日本のように外国語として英語を学んでいる環境では、ある程度仕方がないことかもしれません。そこで大切になるのが、授業の「内」と「外」での学習を有機的につなげ、コミュニケーションや自己表現の方向へと生徒を段階的に誘導し、さらに評価で補強していくような教師側の計画性(仕込み)なのです。

具体的な方法として「授業の円環」の考え方を導入することを、私はお薦めしています。授業の円環とは、実際の授業はもちろんのこと、予習や復習、評価も含めて一つの授業である、と位置づける考え方をさします(次頁図1参照)。この円環では、まず次の授業でやる内容を予習課題の中に仕込んでおきます。そして、この授業「外」での予備学習を利用して、授業「内」での活動を行っていきます。ま

た、授業ではできるだけ活動重視にしており、説明などは要点のみに限定します。授業が終わると、再び授業「外」で、授業「内」の活動・説明などと関連した復習活動を行います。続いて、余裕のある生徒は発展学習を授業「外」で行い、さらに次の予習もこなします。余裕がなければ、復習活動から次の時間の予習活動へ行っても構いません。このように円を描くようにして、授業内での活動と教室外の学習を関連づけて、その中に「学び」を成立させていくのが「授業の円環」の考え方です。この考え方で授業を設計すれば、生徒は授業「外」での学習へ参加せざるを得なくなります。ここへ評価の観点を導入し、コミュニケーションや自己表現を重要視するというメッセージを生徒に示せば、波及効果の面でも一定方向へ誘導することが可能となります。

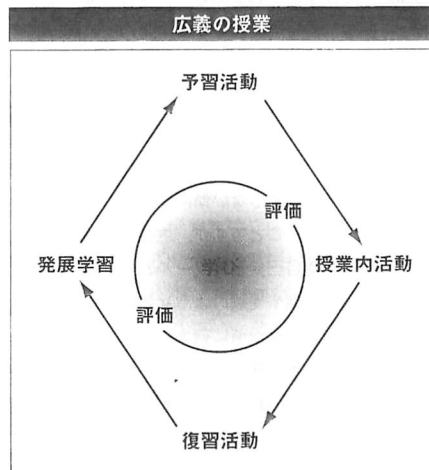


図1 「授業の円環」の概念図

もちろん、このような強制的な学習をよしとされない先生も多いかもしれません。しかし、授業「外」での学習も射程に入れて学習習慣を形成するためには、ある程度枠にはめる作業が最初はどうしても必要となります。ただし、この枠の中で、いつまでも強制的に学習させられているのではよくありません。この枠を越えて、自主的に学ぶように変えていくためには、次に「学ぶ喜び」を感じさせることが大切となります。

4. 成功体験の重要性

では、「学ぶ喜び」はどうやって生じてくるのでしょうか。きわめて難しく一筋縄ではいかない問題なのですが、あえて単純化して答えると、どうやら成功体験を積み重ねてあげることが大切ようです。どんな小さなことでも、自分の努力が「誉められた」、「認められた」という感覚を味わった生徒は、同じ体験を求めて強制的枠を少しずつ越えてくるようです。そして、この成功体験をスムーズに味わわせるためには、教師による「手助け」が必要となります。例えば、ちょっとしたヒントや誘導、事前の仕込み、誉めことばなどが手助けとなり得ます。筆者らは、以前、教師が与える手助けとして、授業「内」の誉め・励ましことば (Verbal Encouragement: VE) の使用を調査したことがあります。結果は、「教師のVEは驚くほど単調で、手助けとしての外的なものが多い」というものでした。つまり生徒たちが好むVEと先生方が使うVEの間には、かなりのギャップがあるのです。教室「内」の活動ですらこんなにギャップがあるのですから、教室「外」の学習を促進するためには、よほど戦略的にVEを出していかなければなりません。筆者の観察からいうと、教室「外」での学習におけるVE使用で大切になるのは、「自分の英語学習のことを気にしてくれている人がいる」というメッセージ (例えば「最近、英語がんばってるね」、「小テストの準備はバッチリ?」など) を生徒個々人に向けて送ることだと思います。押しつけにならない程度に、しかし継続的に、「気にしているよ」という姿勢をVEで見せることが、教室「外」での学習継続に役立つのです。そして、このような手助けを与えつつも、それを徐々に減らしていく。こういった段階的な切替戦略もまた重要なようです。

「手助け」と同様に大切なのは、「モデル」の提示です。学習を成功させるためには、成功への道筋を示したモデルが必要となります。⁵ 飲み込みが早く、新しいことをいきなりやらされても、すぐにできてしまう生徒は確かにいます。しかし大多数の生徒たちはモデルを必要とするのです。そして面白いことに、モデルさえ示せば、比較的難しいことでも

彼らは意外とこなせてしまえるのです。ただ授業「外」の学習では、生徒の反応を見ながらモデルを出すことはできません。それゆえ、授業「内」で事前にモデルを出し、反応を見ながら調整をして、その後、授業「外」で活動をやらせるような周到な仕込みが大切となるのです。

ここまで手助けとモデルを活用して成功体験を味わわせることにより、強制的枠をこえて自主性が伸ばせる可能性があることを述べてきました。実はあともう一つ、重要な要素があります。それは「協同学習」の視点です。

5. 協同学習の視点

日本での学習を中心にして高度な英語力を身につけた「英語達人」たちの研究によると、彼らは「他人の存在」というものを学習の中で重要視していたことがわかります。学習とは孤独なものであり、一人きりでその孤独な学習を継続していくには、相当な意思の強さが必要となります。なかなか続くものではありません。そこで、達人たちですら、同じ程度の英語力を持ったライバル的な人物や、自分より少し上だけで努力すれば手の届きそうな英語力を持った他者を見つけ出し、互いに切磋琢磨し合っているのです。ライバルといっても敵愾心を持つ相手ではなく、一種の目標 (憧れ) であり、学習方法を互いに教え合うような仲間と考えるとわかりやすいでしょう。達人たちは、こうやって他者を設定し、意見を交換することで、自分の学習の視点や方法を拡張し、なおかつ、ペースメーカー、あるいは動機づけ要因としても利用しているのです。上の例はかなり高度なレベルの話ですが、これを中学生の学びに置き換えるとすれば、一緒に学習する仲間を作り出すことが自主学習の継続のためには重要になる、ということ意味します。もちろん、必ずしも常に一緒に学ぶ必要はありませんが、教室「外」で定期的に学習を共にするグループを作り、お互いに進捗状況を確認しながら協同学習を行うことは、自主学習のペース作りにはとても有効なことのようです。

6. おわりに

自ら学ぶ姿勢の大切さとその方法について、ここ

までいろいろと述べてきました。先生方の中には「これは理想論でしょう」、「現実にはそううまくいきませんよ」と感じられた方もおられることでしょう。厳しい現実と直面されている先生方の言であれば、謙虚に聞かねばなりません。ただ、「理想論だ」、「現実ではうまくいかない」といって何も行動をおこななければ、いかなる変化も引き起こすことができません。確かに、ここまで述べたことは研究データに基づく理論にしかすぎません。実際には、さまざまな条件により、提案している方法がどの程度うまくいくのかは異なってくると思います。まだ不確定な要素が多いことも否めません。しかし、だからといって教室外での自主学習を促進する必要がない、ということにはならないのです。PISA調査で報告されているような学力低下を目の当たりにしているのですから、我々はすぐにでも行動を起こす必要があります。そうしなければ、現在の生徒たちの学力向上がままならないのです。困難な作業ですが、この点も踏まえて、ぜひ生徒たちの自主性を育む試みに挑戦し、その成果を皆さんで共有してみてください。きっとそこから理論に肉付けがなされ、理想論が姿を消していくことでしょうから。

(注)

1. $\{[(50 \text{ 分} \times 3 \text{ 回} \times 35 \text{ 週} \times 3 \text{ 年間}) \div 60] \text{ で必修時間数を計算し、これに選択英語を3年間で合計35単位時間学習したものと仮定して積算した。}$
2. 実質時間数は1単位時間の80%が授業にあてられたものとして積算した。
3. 高等学校の時間数は、Oral I、英語I、英語II、リーディング、ライティングの17単位を履修したと仮定し、1単位時間あたり80%を授業にあてたものとして積算した。
4. フィンランドでは高校卒業時までに684時間しか英語を学習していないにもかかわらず生徒たちが比較的高い英語力を身につけていることから、時間数が少ないことは必ずしも英語力が向上しない主要因にはならないという説もある (Ito, 2006)。
5. ここでいうモデルには、発音のモデルとなるような題材から問題解決の手順となる例示までを包括的に含む。

【参考文献】

- 伊東治巳 (1997). 「カナダのバイリンガル教育」 汲水社
- Ito, H. (2006). English language education at Finnish primary schools through teachers' perceptions and beliefs. *JACET Bulletin*, 43, 29-42.
- Sugita, M. & Takeuchi, O. (2006). Verbal encouragements for motivating EFL learners. *JACET Bulletin*, 43, 59-71.
- 竹内 理 (2003). 『より良い外国語学習法を求めて』 松柏社